

慢性痛
急性痛

香曾我部義則先生の今月のカルテ

vol.81

ペインクリニックの現場から

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生と藤井洋泉先生が、痛みの治療や緩和についての情報を届けてくれる「ペインクリニックの現場から」。今回は前回に続き、香曾我部先生がヘルニアの治療について話をしてくれま



■プロフィール こうそがべ・よしのり
昭和54年に岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長に。平成16年から現職。日本麻酔学会指導医。日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属

腰椎椎間板ヘルニア 脊、筋力低下、膀胱（ぼう）ニアがあったからといっは、脱出の仕方によって（ぼう）直腸障害などの正中型、傍正中型、外側馬尾神経腫脹（しゅちょう）型に分けられることを前回説明しました。

正中型は脊（せき）髄本体を圧迫するため、腰下肢痛に加え冷感、知覚障

ます。例えば、腰椎5番の右側のヘルニアの場合、右腰から右臀（でん）部大腿（だいたい）外側ひざの横から下肢、足関節から親指に痛み・しびれが生じます。

診断は、レントゲン検査ではヘルニアを描出しにくいので、MRIで行います。このとき無症候性ヘルニアが認められる場合もありますが、ヘル

ニア治療の80〜90%は保存的治療で軽快痛みの悪循環が生じた場合、まずは硬膜外ブロックを

ヘルニアの圧迫だけで、知覚神経（痛みを伝える）、運動神経（筋肉を動かす）、交感神経（血管を収縮させる）に作用し物質が作られ、神経を刺激すると痛みが強くなり、痛みによりさらに痛み物質が産生され続け、痛みが増し、同時に血流低下を招く悪循環が生じます。このような場合、悪循環を断つブロック治療の出番となります。

腰下肢症状を鎮めるブロック方法には、①硬膜外ブロック②大腰筋筋溝ブロック③神経根ブロックがあります。第一に選択するのは硬膜外ブロックです。今回は硬膜外ブロック

です。運動神経（筋肉を動かす）、交感神経（血管を収縮させる）に作用し物質が作られ、神経を刺激すると痛みが強くなり、痛みによりさらに痛み物質が産生され続け、痛みが増し、同時に血流低下を招く悪循環が生じます。このような場合、悪循環を断つブロック治療の出番となります。

6(209)333554

梶木病院（北区西花匠の香曾我部先生です。☎08